

# 世界の人口増加と農耕地面積の推移

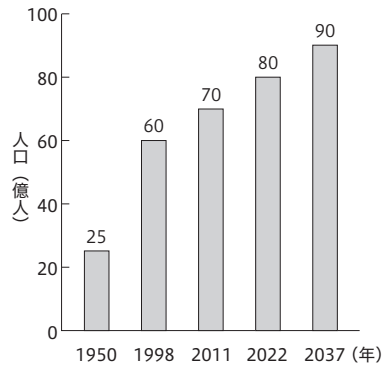


図1 世界人口の推移と見通し

(資料: 国連「世界人口推計2022」2022年7月)

表1 世界推計人口ランキング上位10カ国 (単位: 億人)

2050年	世界計	96.87
1位	インド	(16.68)
2位	中国	(13.17)
3位	米国	(3.75)
3位	ナイジェリア	(3.75)
5位	パキスタン	(3.66)
6位	インドネシア	(3.17)
7位	ブラジル	(2.31)
8位	コンゴ民主共和国	(2.15)
9位	エチオピア	(2.13)
10位	バングラデシュ	(2.04)

(資料: 国連「世界人口推計2022」2022年7月)

① 収穫面積は栽培した面積のうち、実際に収穫した面積。

## 止まらぬ途上国の人口増加

1950年に25億人だった世界人口は48年後の1998年には35億人増加し、60億人に増加した。この間を平均すると10億人増加するのに、約13.7年かかっている。

2022年に発表された国連人口推計によると、60億人から70億人に達するまでは約13年、70億人から80億人までは約11年と増加のスピードが加速している(図1)。

しかし、90億人に達するのは2037年と予測されており、80億人から約15年かかり、人口増加の勢いは若干小さくなると見込まれている。

2050年までの世界人口増加の半分以上は、コンゴ民主共和国やエジプト、エチオピア、インド、ナイジェリア、パキスタン、フィリピン、タンザニアの8カ国に集中することになると予想されている。

国別に2050年の推計人口を見ると、インドが中国を抜いて16.68億人と最も多く、次いで中国が13.17億人との予測である(表1)。

一方、先進諸国の多くは、多産から少産に向かっており、中国においても早ければ2023年から総人口が減少に転じるとされているが、インドやアフリカでは人口増加は続いていくと考えられている。

## 増加が続く世界の穀物消費量

食料の確保は、昔も今も人類の最大の課題である。人類は食料問題を農耕の発明によって切り抜け、より多くの人口を養うことを可能にしてきたが、増え続ける人口を食料生産(とりわけ主食となる穀物生産)で支え切れるのが課題になっている。

穀物の収穫面積①は1960年代から停滞しており、世界人口増加のなかで、1人当たりの収穫面積は減少を続けている。しかし、これまで世界の穀物生産量の増加は、農業技術の革新による単収(→p.36「水田の活用と飼料用米の増産」参照)の向上で支えられてきた。

世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移している(図2)。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加している。一方、生産量は、

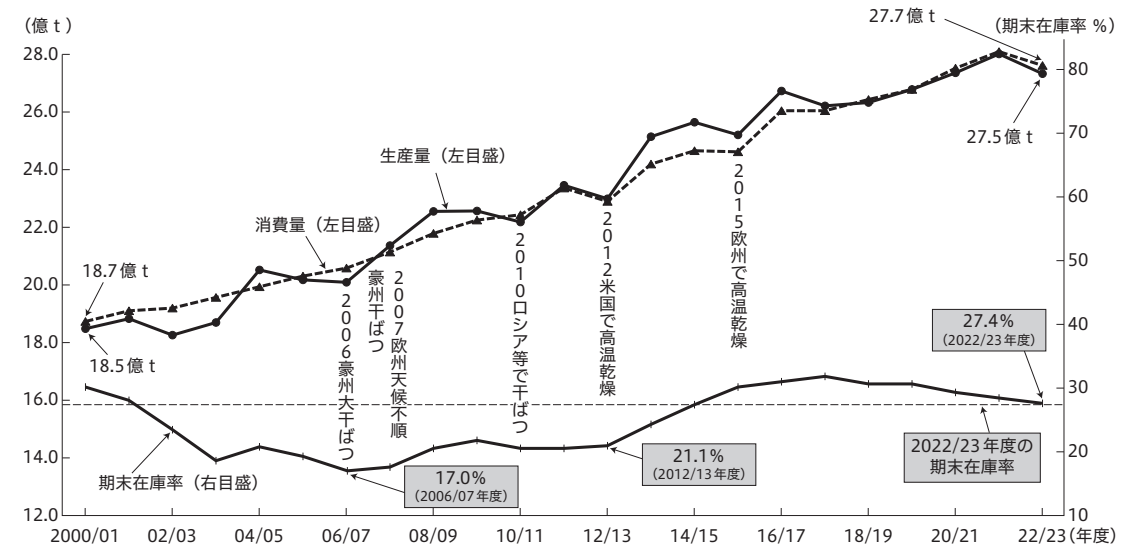


図2 世界の穀物の生産量、消費量、期末在庫率 (資料: 農林水産省「世界の穀物需給及び価格の推移」2023年3月)

注1: 穀物は、コム、とうもろこし、小麦、大麦等

注2: 期末在庫率 = 期末在庫量 ÷ 年間総消費量 × 100

主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。期末在庫率については、2022/23年度は生産量が消費量を下回り、27.4%と前年度より低下する見込みである。

## 世界で加速する農地争奪

2008年の穀物価格の高騰(ダイズ・コムギ・トウモロコシが輸出国の輸出禁止もあって史上最高価格を記録)を契機に、食料輸入国の企業などがアジア、南米、アフリカなどに対する大型農業投資を活性化させている。輸入量確保のために中国、韓国、中東諸国などの企業が投資先の途上国の土地に数十年の長期貸借契約を結ぶケースが多くなっている。外国企業による大規模な農地取得が途上国の貧しい農民から耕作可能な土地を奪った場合、収穫物が現地には出回らず、食料不足などの深刻な被害を生じさせるおそれがある。

この状況は、世界的な天候不順や、2022年2月に始まったロシアのウクライナ侵攻などによってさらに悪化している。